

避難所 難しい専門的ケア

精神・知的障害者 受け入れ課題は

能登半島地震の被災地で、精神障害や知的障害がある人の避難についての課題が浮かんできている。ケアの態勢が整った場所を探すのは難しく、今も避難所で困難を抱えながら過ごす人もいる。

内では精神障害や知的障害のグループホーム（GH）を運営する一般社団法人「ともえ」の花田仁美代表は、振り返る。

「精神障害や知的障害がある人は、それぞれの特性や背景に応じた支援が必要になる。古民家を改装したGHでは3人とケアの職員が個室で暮らしていたが、1月1日午後、大きな揺れで天井が崩れ落ちた。3人と自宅が被災した通所者の1人に、同法人

施設 職員被災 やむなく避難

「私たちだけで支援するのは限界だった」
1万棟以上の住宅が壊れた石川県七尾市。市



小学校の避難所で過ごす知的障害がある被災者。グループホームの職員が毎日通ってケアをした＝1月24日、石川県七尾市、寺沢知海撮影

がアパートで運営する別のGHの共有スペースに避難してもらった。開いているコンビニなどを回り、飲み水やカップ麺、菓子を買い集めた。

ただ、花田さんや介護福祉士の資格を持つ職員らも、自宅が断水するなどしていた。十分な物資がそろえられない状況で、入所者らの支援を続けるのは難しい。そう考え、1月9日に4人を指定避難所に連れて行った。

運営は「自助」 個別対応困難

避難所の運営は「自助」が中心。食事の準備や掃除などは避難者で分担していた。「専門スタッフがおらず、（入所者らへの）個別の対応はできない」と伝えられた。GH職員が毎日の朝、昼、晩に4人の元を訪れたが、うまくいかなかった。4人には他の人と言えないような特性

があり、苦情が届いた。断水で使用禁止のトイレを使ってしまい、注意されることもあった。長期間過ごすのは難しいと考え、4人のうち2人は避難所を出て、別のGHの1人用の部屋に2人で過ごしてもらうことにした。他の1人はあち

こちに相談した末に金沢市のGHに受け入れてもらえることになったが、もう1人は今も避難所でケアを続ける。

七尾市によると、他の避難所でも障害のある人が夜中に大声を出してしまい、苦情が出たことがあるといい、県外も含めた障害者の受け入れ先を探してきたという。

「何が必要か 事前想定を」
能登半島地震の石川県被災地でも、朝日新聞

の取材によると七尾市、輪島市、珠洲市、志賀町、穴水町、能登町で1月12日までに予定の17%しか開設できなかった。また、福祉避難所ができて、精神障害や知的障害のある人の特性に応じたケアを担える人がすぐに見つからない場合もある。

同社大の立木茂雄教授（福祉防災学）は「福祉避難所は手段の一つだが、それだけで良いという話ではない」と言う。一般の避難所でも、事前に障害者用のスペースを確保しておくなど「障害者を守るために何が必要かを想定しておくことが重要」と指摘する。

花田さんも「災害を想定し、GH同士であらかじめ受け入れ先を決めておくことが必要だった」と話している。

（寺沢知海）

能登地震 救援金受け付け

郵便振替 00110・8・449253 事業団
加入者名＝朝日新聞厚生文化事業団
通信欄に「能登」と明記。紙面掲載の
で匿名を希望される方や、預かり証
送付が不要な方はその旨を
ご記入ください。振込手数料
料はご負担願います。銀行
振り込みなどは同事業団H
Pから。